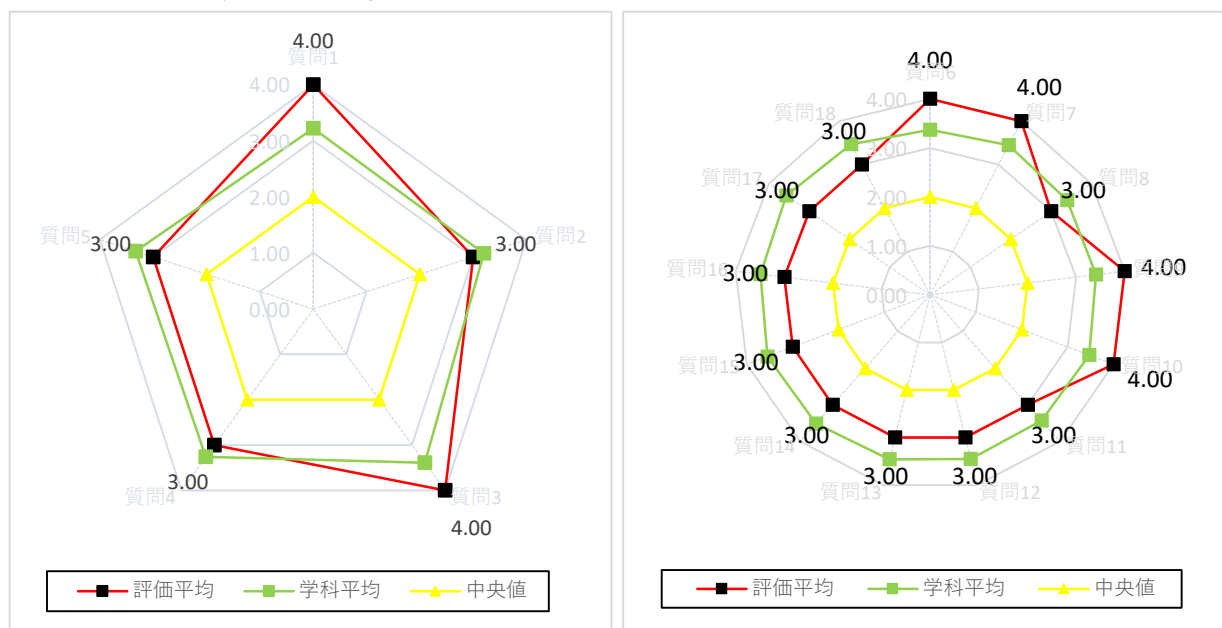


学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろう（初年次教育含）	3名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

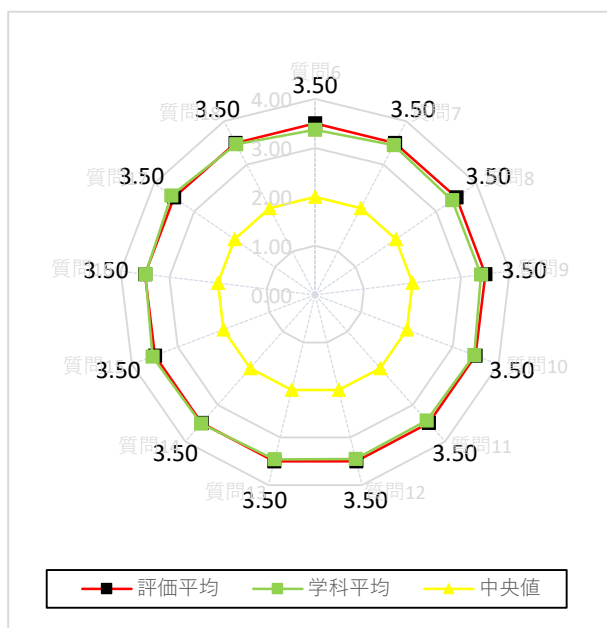
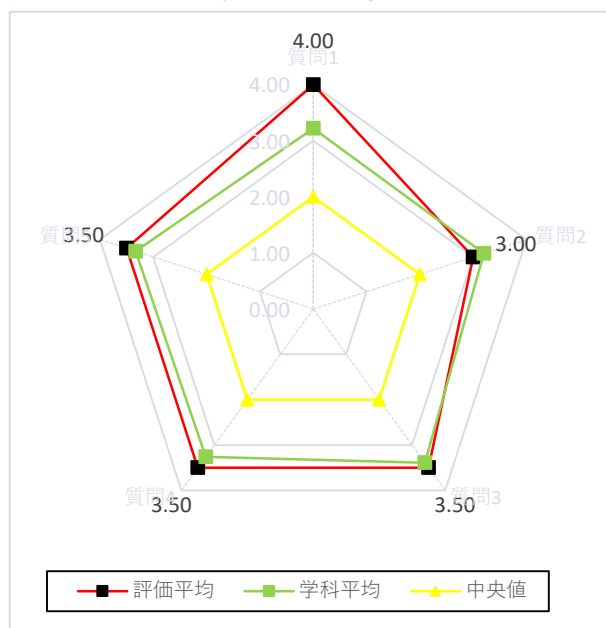
回答者が1名であるため偏りはあると思うが、平均的に低い傾向にある。
複数の教員が関わる授業であるため具体的な内容は把握出来ないが、初年次の基礎科目として学修に取り組めるよう支援が必要だと考えられる。

（３）次年度に向けての取り組み

授業内容に直接関与できる部分が少ないが、面談などでフィードバックを行い学修意欲と自己効力感の向上に努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろう（初年次教育含）	3名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

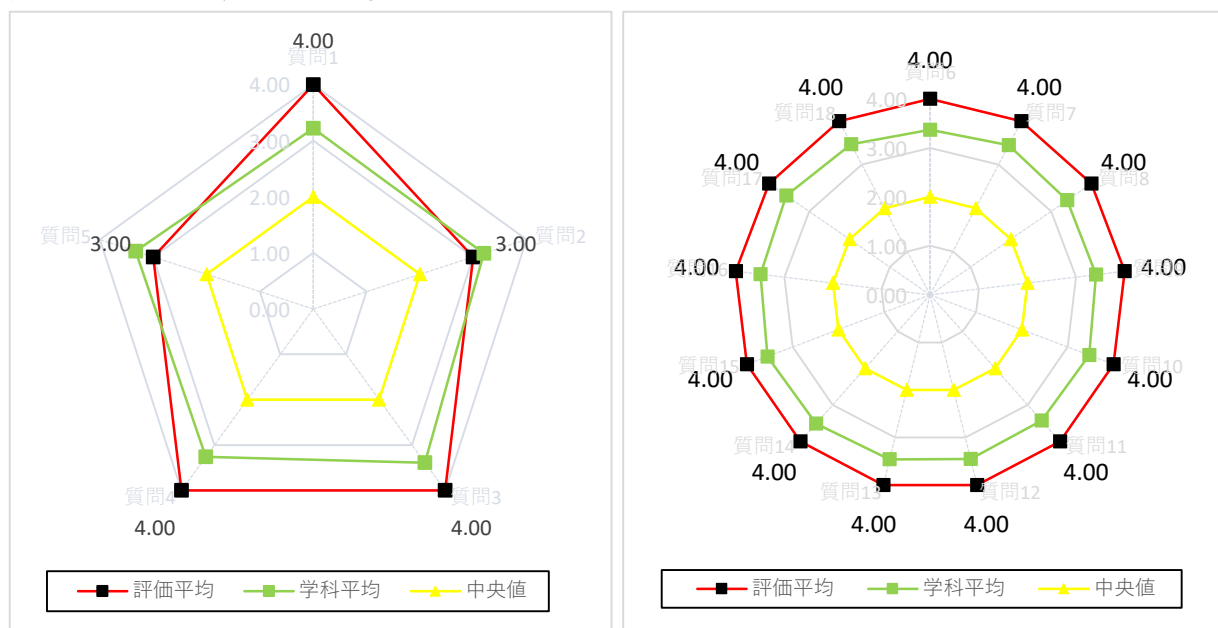
学生1名を除いた評価はおおむね良好であった。
学生自身が主体的に活動ができていたように思う。

（３）次年度に向けての取り組み

授業評価の徹底と周知を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろうⅢ 臨地協働	5名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

オムニバスなので自分の担当分の評価として受け取って良いか迷うが、満足度が高かった点は良かったと思う。

事前課題、演習内容について、学生のレディネスよりも高い要求だったかも知れないが、演習のフィードバックなどでカバー出来たと考えている。

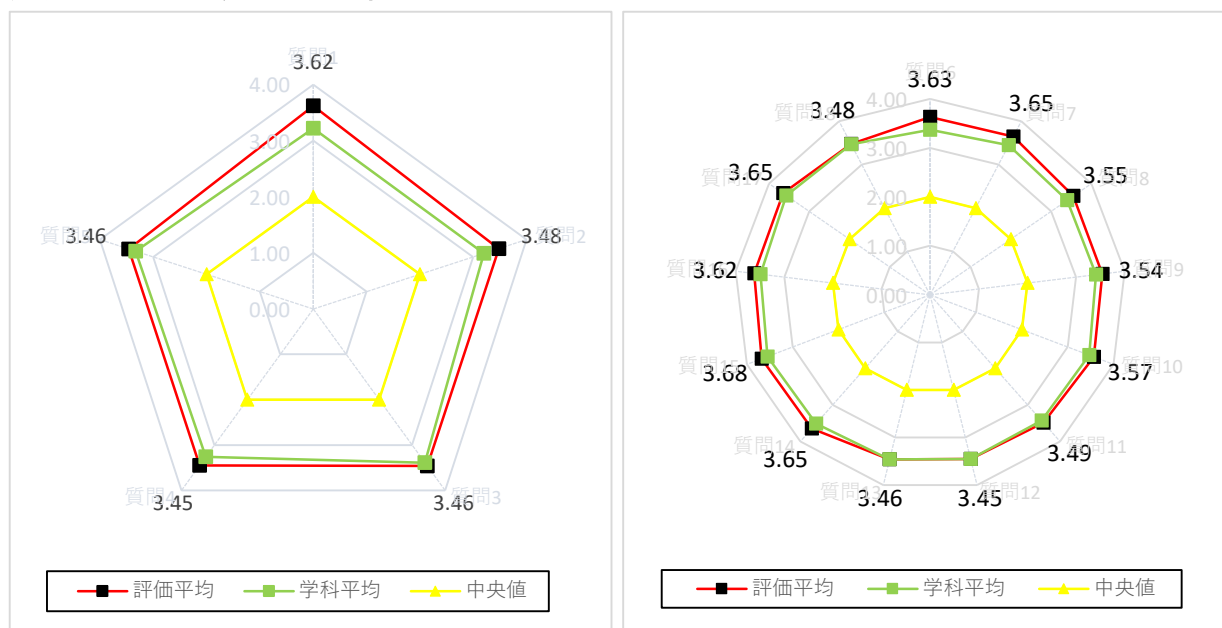
(3) 次年度に向けての取り組み

旧カリキュラム科目なので次年度は実施されないが、学生のレディネスに応じて過度な負担にならない事前課題の出し方を工夫したい。

また、看護実践能力の向上のための知識・技術の習得について、構成的に学修できるよう授業を工夫する。具体的には、事例を通した演習において、必要な知識・技術を提示したうえで習得状況が確認でき、自己評価が自己学修に繋がるように授業を構成する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		フィジカルアセスメント	91名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

教授する内容が膨大なため、教科書に併せて授業内容を整理仕切れなかったことが評価に繋がったと考えている。

毎回の授業はかなり展開が早かったため、ついて行くのが難しいと感じた学生も居たと思う。

臨床上のエピソードに基づいて展開するなどの工夫を行ったが、手技の習得が実践能力に繋がる実感に繋がらないことがあったと思う。

演習においては、肌の露出が必要な手技もある為、女子学生に直接指導できない場面もあり、他の教員の助力が必要な場面があった。

リアクションペーパー、小テストを利用して、学生の疑問には可能な限り対応した。また、自己練習の機会も複数回設定し、学生の学修意欲に応えることができたと考えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

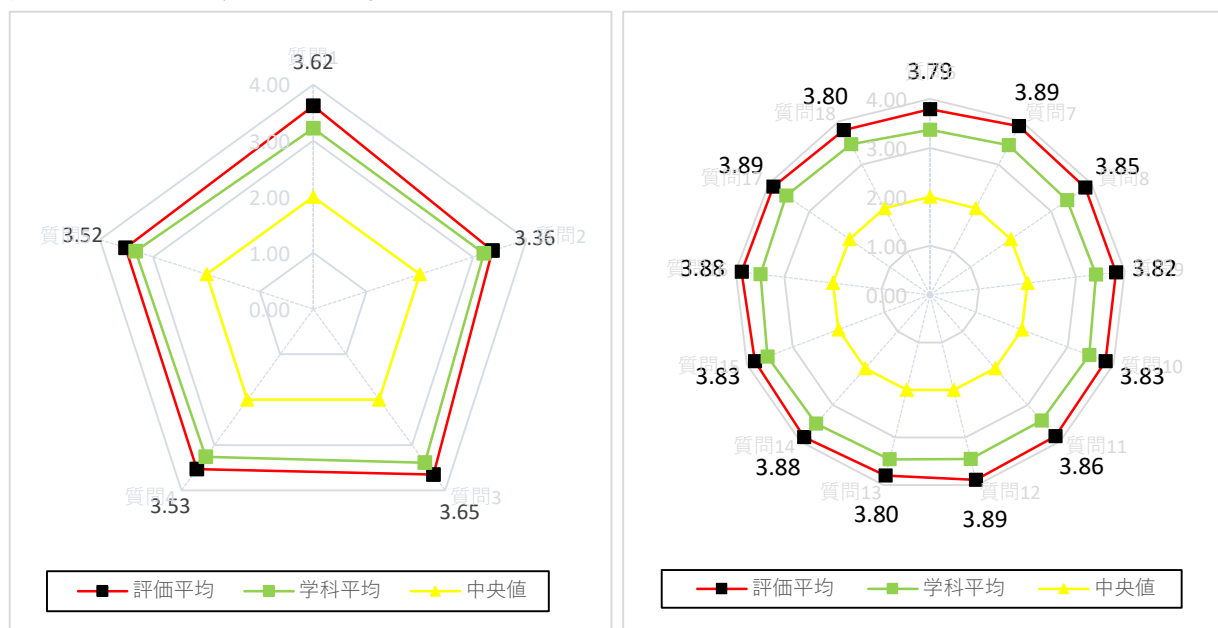
本科目は身体面の対象理解に繋がる科目である為手技の習得が重要となる。

臨床的な実践に繋がるよう、事例を用いて思考するよう演習を設定する。

授業内容については、予習の範囲を明確にして授業内異様の整理をおこない展開が早くならないよう工夫を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護学概論	67名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

【総合評価】

Q6～18はほぼ3.8以上あり、おおむね良い評価であった。

Q6～18について：いずれも3.8/4.0以上であり、特に教員に対する評価は高く、分かりやすいプレゼンテーション、身近な例を用いた理解の促進などの取り組みが評価されたと考える。

また、KJ法を用いたグループワークを活用するなど、授業への参加意識を高めた結果となったと考える。これらについては今後も継続すべき事項と判断する。

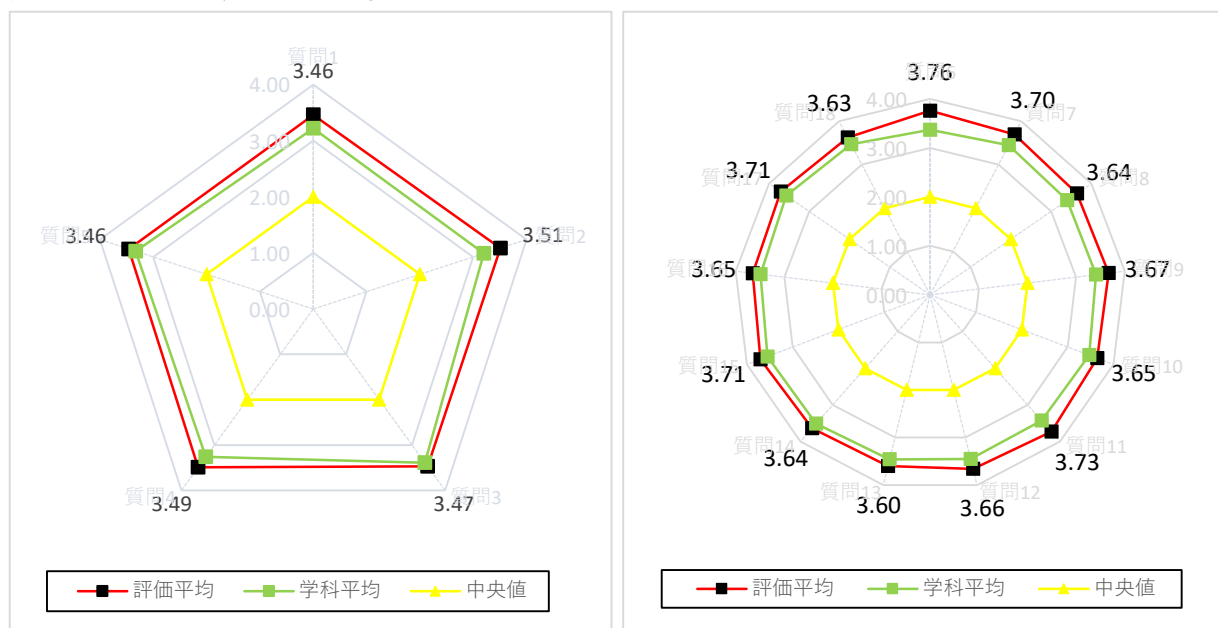
Q1～5について：評価の高かった項目としては、Q1欠席がないか（3.62）、Q3真剣な取り組み（3.65）であり、多くの学生は休まず真面目の授業に取り組んだことの反映であると考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

1. 授業評価で高値項目については、現状を継続する。
2. 講義終了時の質問時間の確保（別途、レスポンスカードでも対応する）。
3. 一斉講義以外の教育方法の検討（学生主体のワーク、PBL方式など。しかし概論という科目の特性を考える場合、一斉講義の重要性も否定できない）。
4. 発展学習について講義時に説明する努力をする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		療養支援看護学方法論Ⅰ (急性)	91名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

授業の特徴も踏まえ、実際の臨床場面について話題提供して興味・関心を引き出すよう心掛け、当該科目の学修に係るモチベーション向上を期待しつつ、授業を展開した。

特に、授業内で用いたPaper Patientsについては国家試験過去問題の状況設定問題を用い、既習内容を含めた説明と授業を行った。

学生の多くが授業に積極的に取り組んでいる様子が窺えたが、中にはPCを堂々と開き、他科目の課題レポートを記載していたり、授業中居眠りしている学生も散見した。

当該授業に係る既習科目の理解が不十分であることが否めないこと、看護学の学修者としての態度・素養に欠ける学生もあり、成績優秀な学生とそうでない学生の差が開いているように思う。

定期試験についても出題範囲について周知・概説していたにもかかわらず複数名が単位を落とし、授業中の説明を認識していない状況が把握できた。

(3) 次年度に向けての取り組み

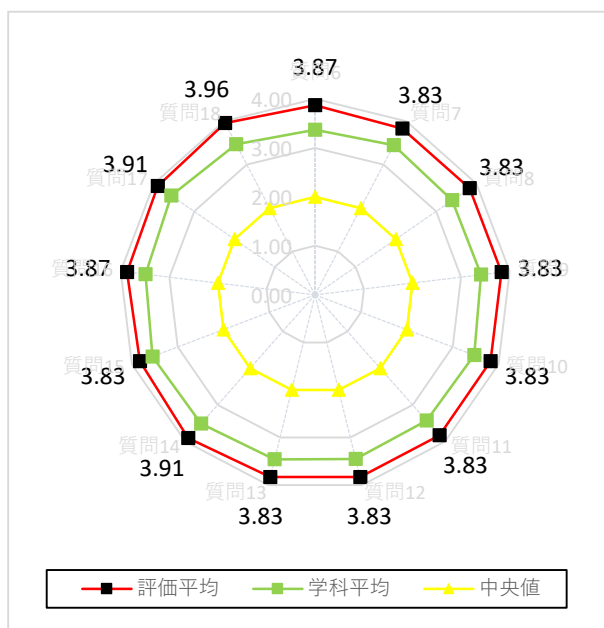
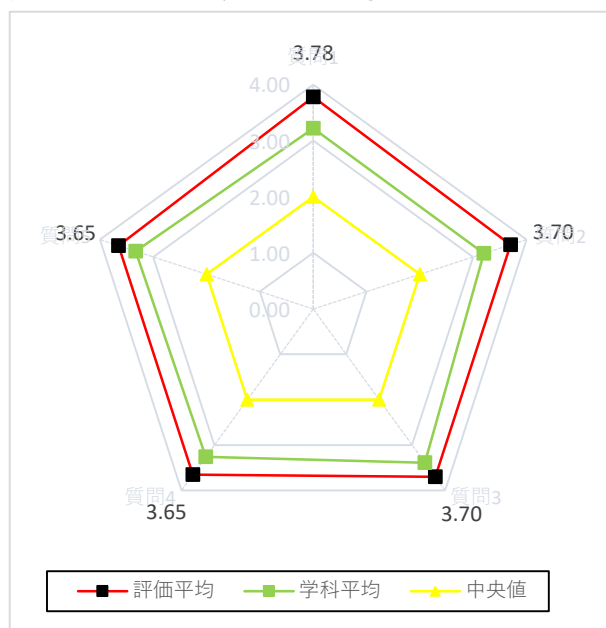
これまで同様、既習科目および臨床実習とのつながりを意識させながら授業展開を行う。

各単元での話題提供を行いながら、国家試験過去問題を適宜引用しながら、当該科目を展開する。

学修が振るわない学生・欠席が多い学生については、担当チューターと連携を取りながら学修支援を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護診断論	41名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

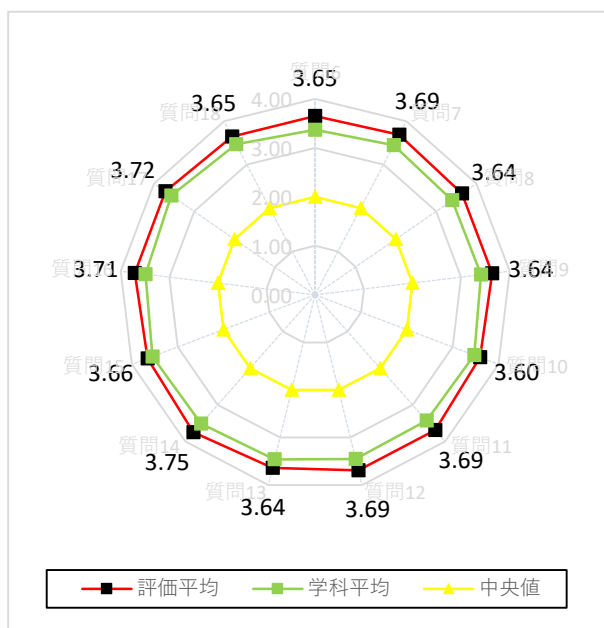
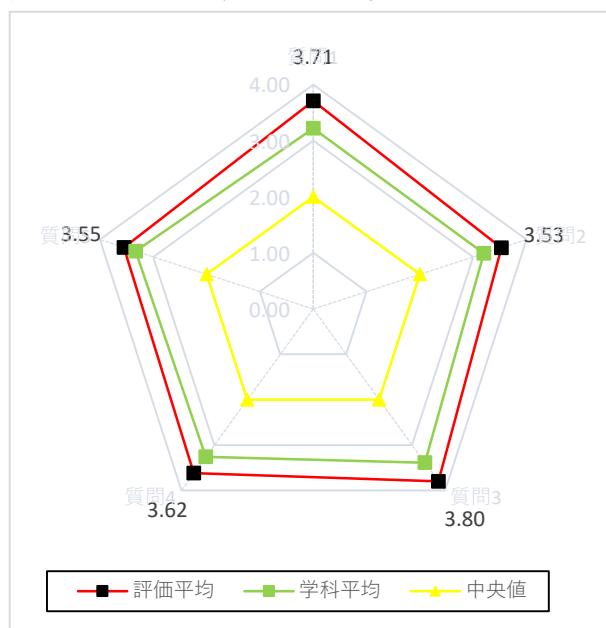
学生からの評価はおおむね良好であった。
授業評価の時期が開講次期よりも遅かったため、回答していない学生も散見した。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業評価のタイミングを学生に周知し、回答を得る。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		療養支援看護学実習Ⅰ (急性)	106名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

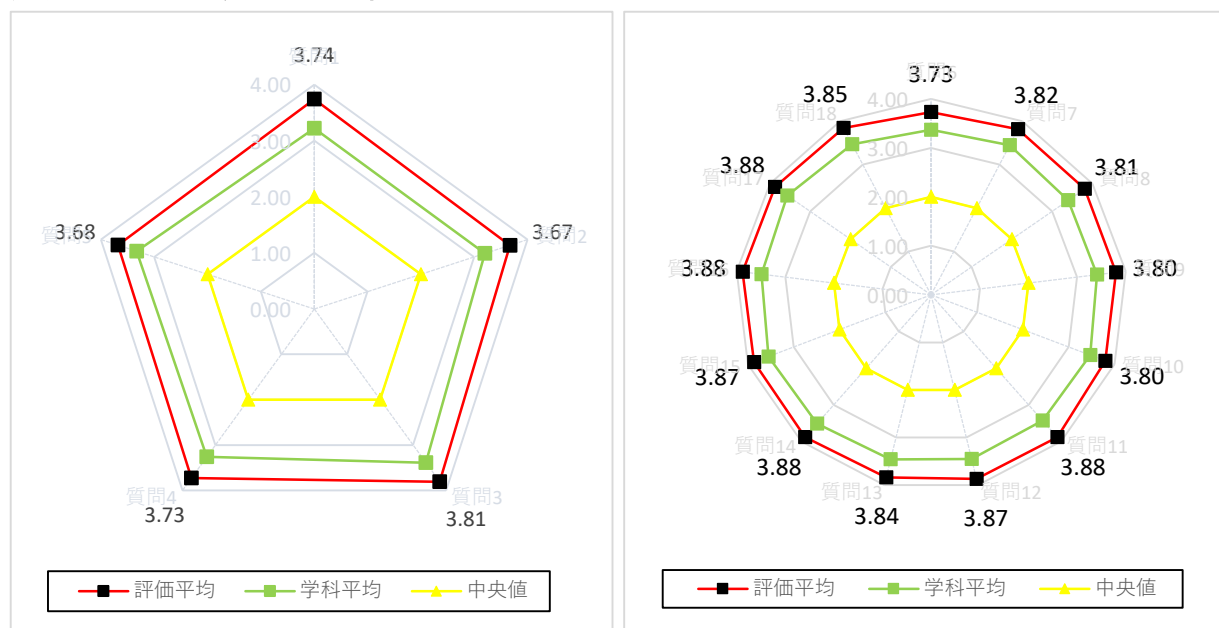
実習科目であったため、学生自身が積極的かつ自主的に学修している様子が窺えた。

(3) 次年度に向けての取り組み

教員による指導の差異を低減できるような工夫が必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		高齢者看護学実習	105名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

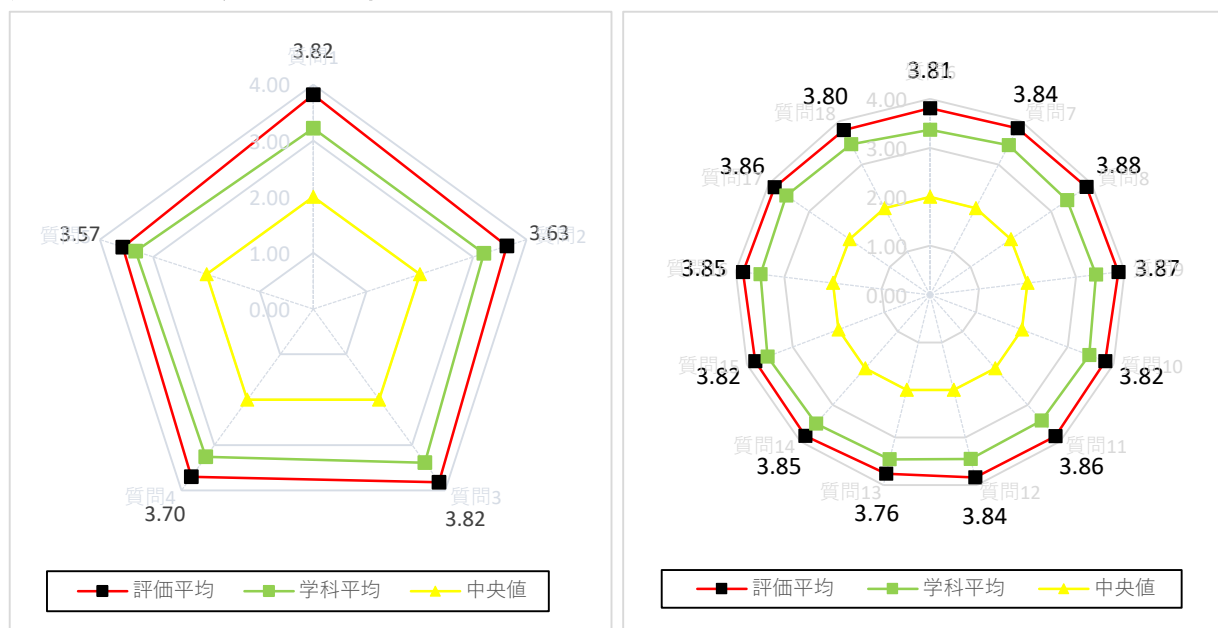
本科目は新カリキュラムで初めての実習となった。実習施設の感染拡大や積雪の影響により一部学内実習に変更する期間があったが、すべてのグループが臨地実習を行うことができ、全学生が、施設実習の実習目的・目標を達成することができた。成績は平均点±標準偏差：88.9点（23年度89.8）（SD 6.0） 最高得点：98点（23年度98）最低得点：74点（23年度73）、授業評価アンケートは98名全員より回答協力を得ることができた。評価結果は以下のとおりである。内容・方法：3.73/4.0以上、教員（指導者）の対応：3.87/4.0以上、総合評価：3.85/4.0と、高評価を得ることができた。臨地での実習時間を確保したことで実践的なスキルの習得、主体性やコミュニケーション能力の向上が図られたと考えられる。臨地最終カンファレンスおよび学内最終カンファレンスでは、高齢者の反応や学生自身の関わり方を省察したり、指導者や他の学生から多角的な視点や評価を得ることで、学生自身の課題に気づくことができ、援助職者・専門職者として必要な能力の成長を促すことができたと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

1-2月の期間は、感染症が蔓延する時期であり、特に高齢者は重症化や生命の危険性に直結することから実習中止や延期を避けることができない。他の看護学校との競合による時期の限定はやむを得ないが、できるだけ実習期間の変更や学内代替実習を避けた実習スケジュールが組めるよう、実習委員会へ意見を具申していく。また、今年度も実習指導には他領域教員や非常勤助手の協力を要請する必要があるため、教員向けオリエンテーションでは、前年度までの実習の課題を含め指導内容や方法が伝わるよう、努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		次世代育成看護学実習Ⅰ (母性)	105名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

次世代育成看護学実習Ⅰ（母性）は5日間の病院実習と3日間の子育て支援実習、2日間の学内実習、計10日間で構成されている。中でも病院実習は5日間という短い時間の中で対象を受持ち、看護過程を展開するハードなスケジュールであり、十分な「専門知識」「アセスメント力」が必要となる。また、新生児沐浴、新生児バイタルサイン測定は実習で学生が実施する看護技術の一つであり、安全に実施するためには習熟した技術の獲得が必要になる。そのため、教員が相当の時間をかけ、一人一人の学生と向き合い、指導する必要があった。その結果が今回の高い評価につながったと分析する。学生自身の自己評価が若干低い、これは実習指導者からの指導・助言にて自分自身に何が不足していたのか十分に理解できた結果なのではないかと考えられ、今後努力すべきことが理解できた結果だと分析する。今後も教育に手を抜くことなく尽力していきたい。

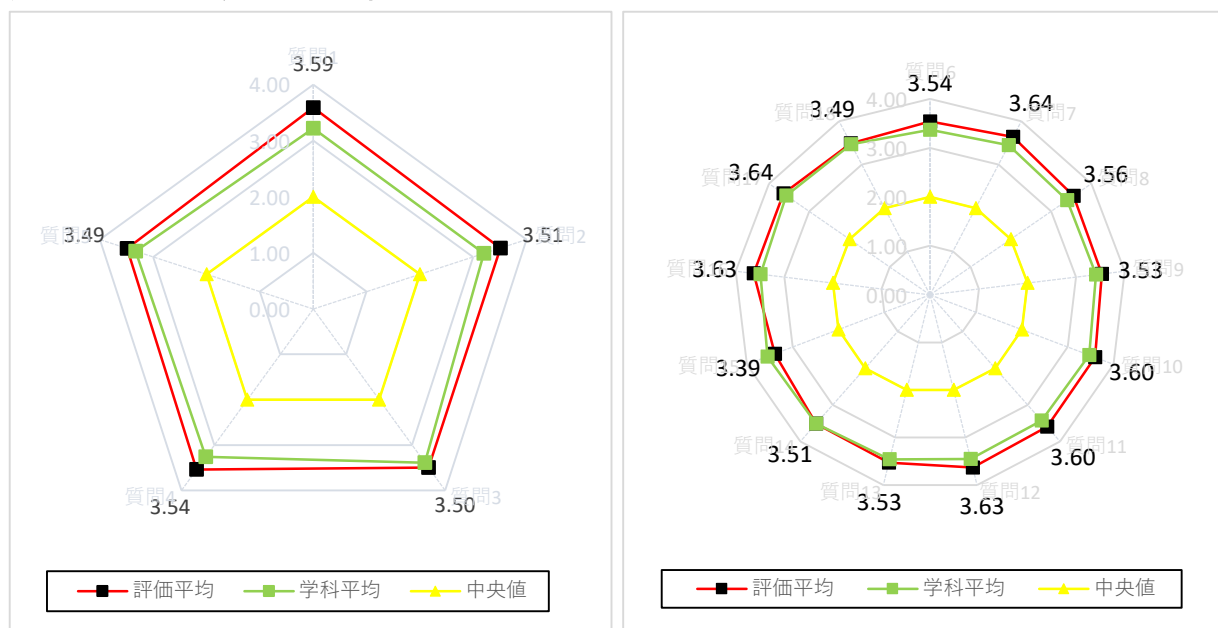
(3) 次年度に向けての取り組み

実習前の準備についてORでも説明してきたが、不十分な学生も多く（自分では準備できていると思っていたが、実際実習に出ると不足していることに気づく）、次年度はより具体的に事前学習の内容を提示したいと考える。

年々学生の学力が低下している印象があり、今後はより実習指導者と連携を密にし、学生のレディネスに合った指導ができるよう調整していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		次世代育成看護学概論Ⅱ (小児)	91名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

当初の授業スケジュールを変更し、小テスト2回を1回へ変更することへの説明が不足していたと考えられる。

学生の公平に対応しましたかの質問内容に対する点数が低いのは、小テストの回数を減らしたことが影響していると考えられる。

また、質問等に誠実に対応しましたかの点数が低いのは、講義実施前に前回の復習として質問等に対する返答をしてきたが、

これに費やす時間が短かったのではないかと考える。

授業は、15コマすべても講義形式で実施していった。講義のみであると、受け身での授業となるため、学生が主体的に授業に取り組めるような

工夫が必要だと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

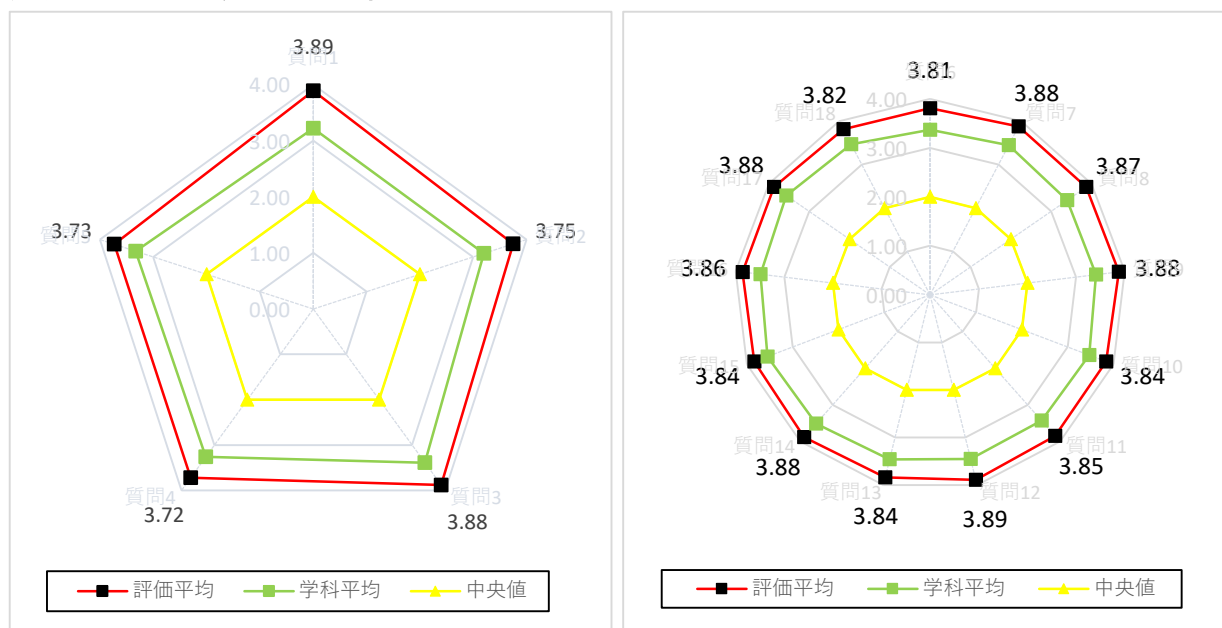
・授業の中に小テスト（成績に入る）を予定する際は、なるべく予定変更をしないようにする。

変更が必要な場合は、事前に、なぜ変更するのかを丁寧に説明していく。

授業は、映像やグループワークを取り入れ、学生が主体的に学ぶことができるようにしていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		次世代育成看護学実習Ⅱ (小児)	105名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

次世代育成看護学実習Ⅱ（小児）は、1週間の保育園実習と1週間の施設実習がある。今年度より保育所実習初日に園児への健康教育の媒体づくりやおもちゃ作成を実施し、それらの媒体を園児の前で実施した。学生は主体的に実習に取り組むことができ、自分たちが実施した内容に対しての子どもたちの反応を見ることで園児への理解や実習の高評価につながったのではないかと感じる。

また、病院や施設は複数の施設に行き、その行く先々で内容の違う実習を行うが、教員が学生につき、分からないことや不安に対して親身になって対応し、学生の発問に対して丁寧に答えたことがよかったと考える。

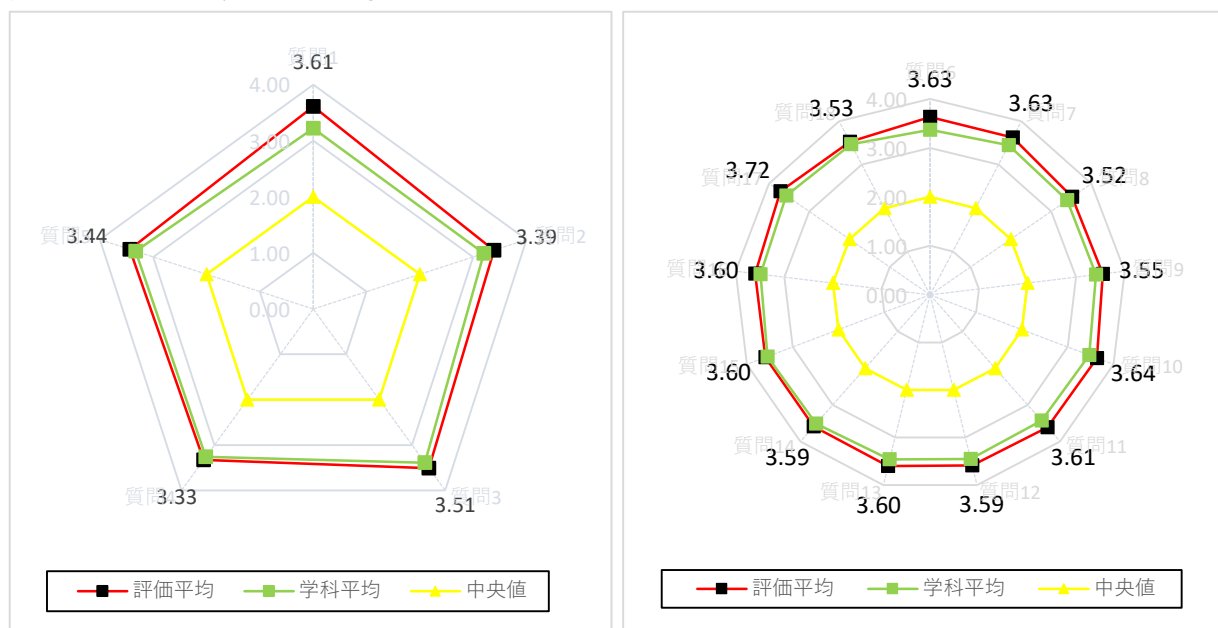
(3) 次年度に向けての取り組み

学生が何に困り、何を求めているかを把握し、小児の実習を担当する教員皆で情報を共有しながら学生に対応していきたい。

また、学生の思いを希望をしっかりと聞き、学生を尊重したかわりを今後も実施していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		家族看護学	92名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

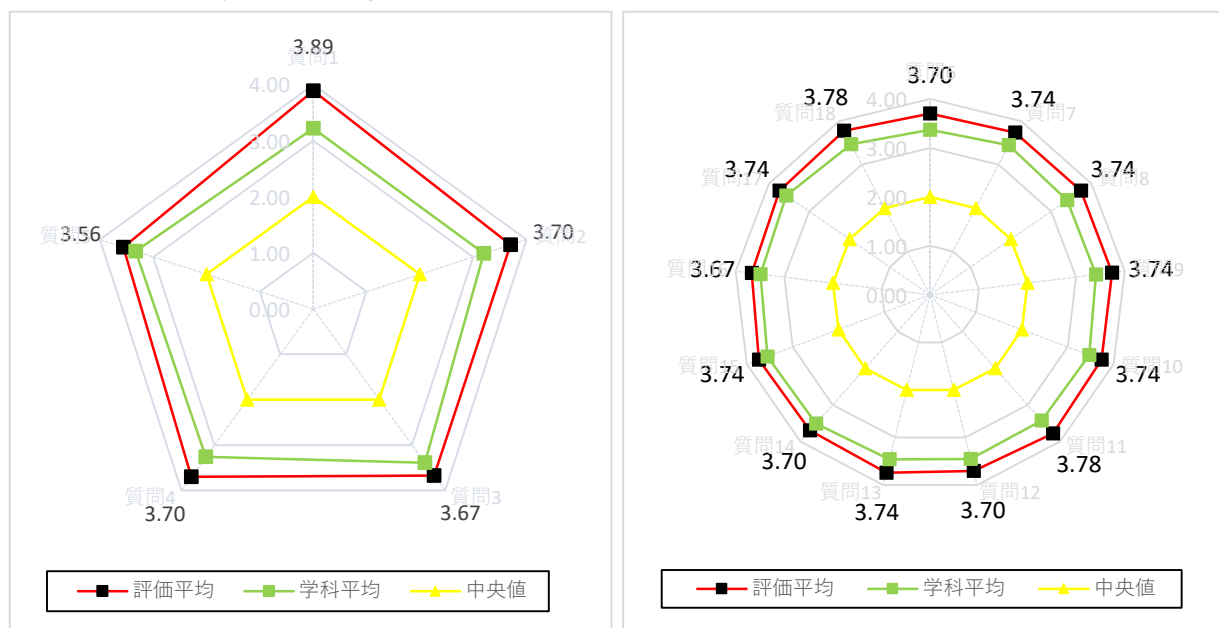
92名中75名の学生からアンケートの協力が得られた。2024年度は、3名の教員が担当し講義・演習をおこなった。演習では家族看護学の中心的な目的である障害や疾患を抱える患者・家族への包括的な支援方法について看護過程の展開を通して学習した。講義では様々な発達段階や疾患のステージ、あるいは文化・社会的背景の違いから対象のニーズが異なることを理解できるよう、小児看護、老年看護の臨床経験や研究等を専門とする教員による講義をおこなった。授業評価による学生の本科目への取り組みとしては、問1-5では、すべての項目において平均3.3点を超えており学生は真摯な態度で授業に参加できたと評価できる。13・14回目にはそれまでの学修内容を踏襲した個人ワーク・グループワークを組み入れ学生の知識の定着と主体性を引き出す工夫をおこなった。授業内容や教員の対応については、概ね3・4点を回答しており、学生の満足度は高かったと評価できる。

(3) 次年度に向けての取り組み

ICTの導入や多様性、高齢化など社会背景の変化に伴い、家族に求められる機能自体にも変化が生じている。また家族形態自体も変化しており、核家族だけでなくシングルペアレント家庭・同性愛者の家族・里親家庭など、さまざまな形態の変化、性別役割分業の変化や、夫婦間の役割分担のリベラル化など、ジェンダーの視点も柔軟に取り入れ、家族をとらえる必要がある。様々な側面から家族を見ることができるよう、社会の動向を抑え講義に取り入れていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護倫理学	93名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

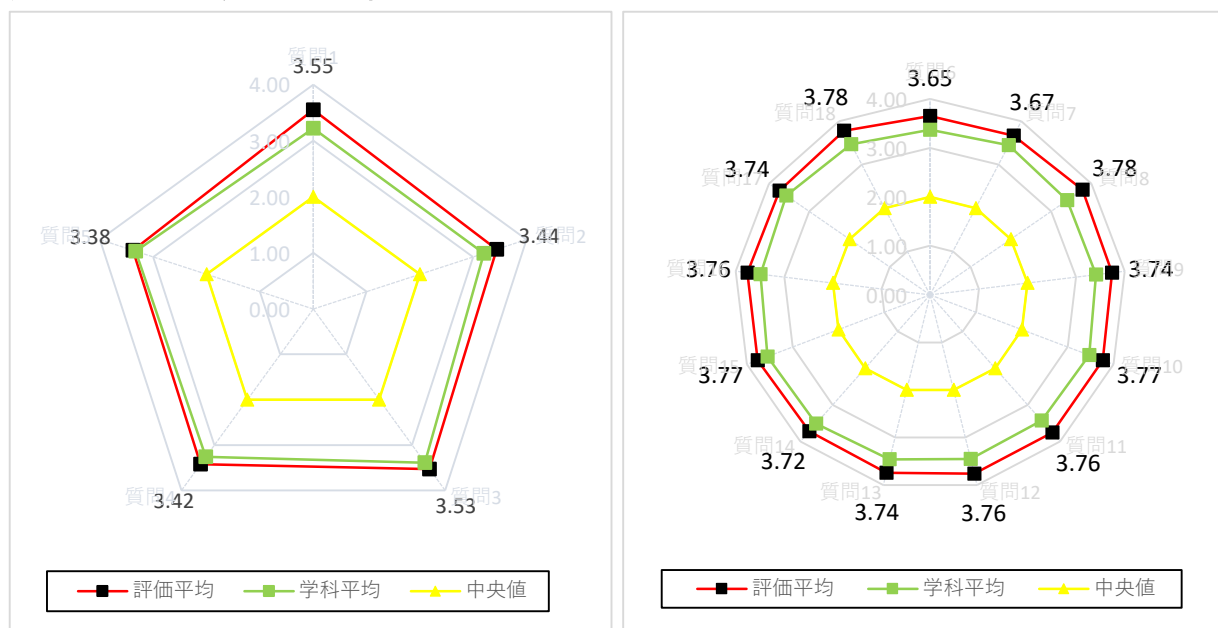
Q6～Q18はほぼ3.7～3.8であり、概ね良い評価であった。
Q17のみ3.67を示した。低い評価とは言えないが、他の項目がすべて3.7以上を示していることを考えると、積極的にやり取りをする授業の工夫が課題といえる。
一方で、2年生の前期という時期は、臨床における倫理場面に装具する機会はほとんどないことから、双方向的なやり取りをするには難しく、学生もイメージを描けないという問題も抱えている。
共同の授業の中では、事例を使ってGWや発表も行っており、学生からもリフレクションシートでは学びを深化させることができていることから、参加度や双方向でのやり取りを活性化させるために継続すべき事項と考える。
Q1～Q5で高い評価項目は、Q1欠席の有無(3.89)、Q2シラバスの活用(3.7)、Q4授業理解への工夫(3.7)であり、多くの学生が休まず、シラバスを確認しながら事前及び事後課題に取り組み、理解を深めようと取り組んだことが反映されていると考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

1. 授業評価で高値項目については現状を維持する
2. 他の高値項目を下回った双方向的なやり取りについては、一方向の講義形式以外の教育方法を検討する。
3. 実習経験がほとんどない2年生の時期に倫理感性を醸成させるのは難しいため、気づきを生菜Gせるような視聴覚教材や実際の事例を活用して考えさせる授業の展開に取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		学校保健概論	81名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

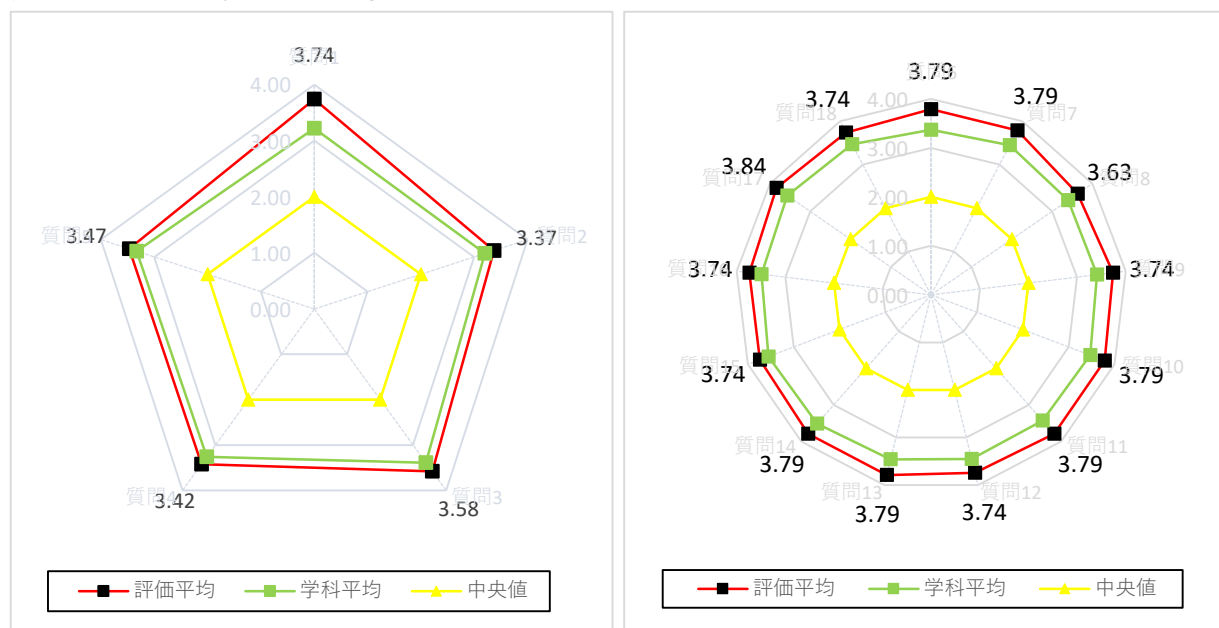
本科目は、教職課程と保健師課程の必修科目となっているが看護師課程のみの学生も履修しているため、講義内容が養護教諭に偏ることなく展開できるように演習を多く取り入れた。授業評価アンケートの回答率は90%以上であった。授業の総合評価は平均3.66/4.00点であり、学生の自己評価は3.38/4.00点であった。授業評価の中で高かった項目は「質問8 授業は興味・関心が持てる工夫がされていたか」があり、自由記述にも「座学演習やグループワークがあって楽しかった」、「座学だけではなく保健だよりの作成など演習があってよかった」という記載から、グループワークや演習を授業方法に活かすようにしたことが高評価につながったと考える。しかしながら、評価の提示や試験の説明が曖昧で改善を求める自由記述があり該当学生には至らない点があり申し訳なく思う。今後は丁寧な説明を行うように改善をしていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

現在の高評価を維持できるように継続していきたい。それには演習形式を取り入れながら、受講学生が興味関心を引きやすい課題を用意しグループワークを活用していきたい。評価と試験については講義開始時・試験前など適宜、学生に丁寧に説明を入れていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		医療安全管理論	69名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

Q6～Q18はほぼ3.74～3.84の間であり、概ね良い評価であった。

Q8のみ3.63を示した。低い評価とは言えないが、保管項目がすべて3.73以上を示していることを鑑みて、興味・関心が持てる授業の工夫が課題である。

1年生の後期の授業科目であり、臨床の現場に一度も出ていない学生に対して、いかに医療安全の概念や学生として遵守することを理解させるのかについては、困難な課題である。

視聴覚教材や臨床現場の経験話を活用してイメージさせると同時に、授業だけではなく今後実習等で経験を積み、安全文化やリスク感性を涵養させるための継続的なかわりが必要である。

Q1～Q5について：評価の高かった項目はQ1欠席がないか（3.74）であり、多くの学生が休まずに真面目に授業に参加したことがわかる。

他のQシラバス活用や授業理解の工夫などは、1年生の後期という時期を考えると、どのようにシラバスを活用して教育効果を上げるのか、自分の勉強のスタイルも確立できていないのではないかと推測される。

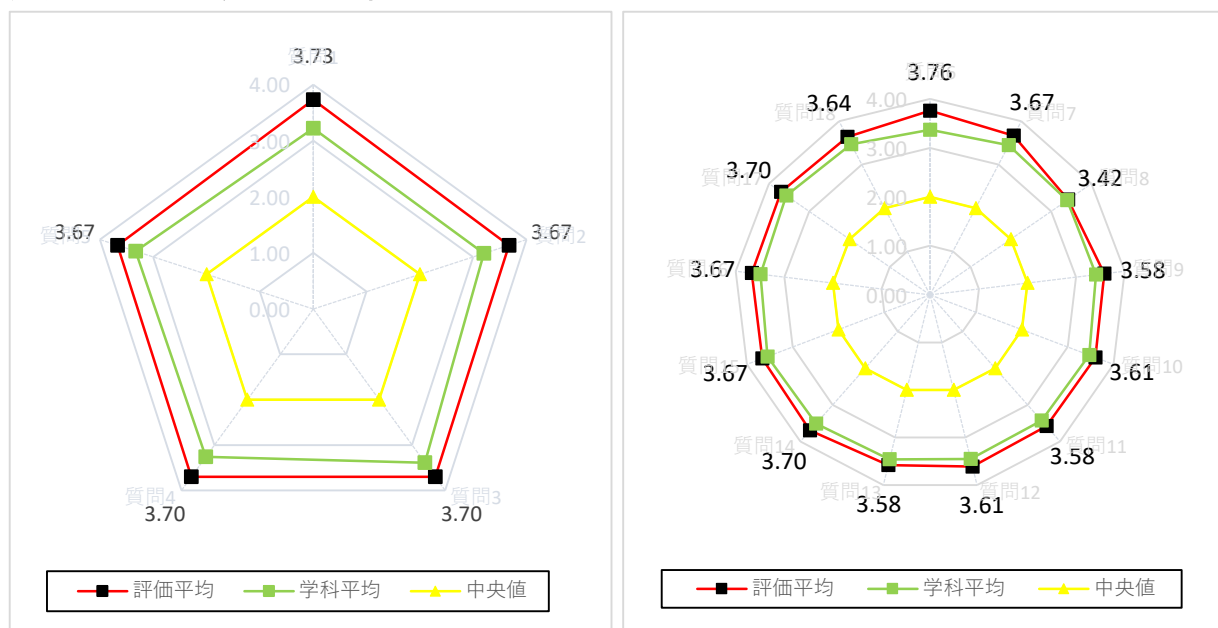
授業開始時のシラバスの説明やガイダンス時にpptに提示して解説しているが、どこまで理解しているのか不明である。

(3) 次年度に向けての取り組み

1. 授業評価で高値項目については現状を継続する。
2. 医療事故等の新聞記事、動画、VTR視聴など、視覚に訴え、よりリアルに感じられるような仕掛けを検討する。
3. リスク感性を高めるための効果的な教育方法（KYTなど）を事前学習、GW、まとめのレポートというようにダイナミックに展開し、興味関心を引き、理解を深められる工夫をする。
4. シラバスの活用方法や事前・事後課題の意味・異議についての説明を開講時以外にも行い、教育効果の向上につなげる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護管理学	91名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

Q6～Q18は3.6～3.7を推移しており平均的な評価といえる。

Q8 (3.42)、Q9 (3.58) が学科平均を若干下回っているのは、教科書に沿ったPPTの資料を基にやや一方的な授業を展開していることが要因と推測したが、Q16 (3.67) では双方向のやり取りをしていると評価する学生も少なくないため、一概には言い難い。

集中講義（火2コマ、金2コマ）が続くため、資料のボリュームが多くなり、重要なポイントが明確化されていないと感じられるのではないだろうか。

また、後期の選択科目である「災害看護」「国際看護」を選択する学生が少ないことも鑑み（授業で触れられるのは本科目のみとなるため）、教科書にない教育項目が増えるため、ボリュームも増え対応しきれていないとも考えられる。

この2つの項目を除けば概ね3.6以上3.7であり、教員の姿勢や態度については問題ないという評価であると考ええる。

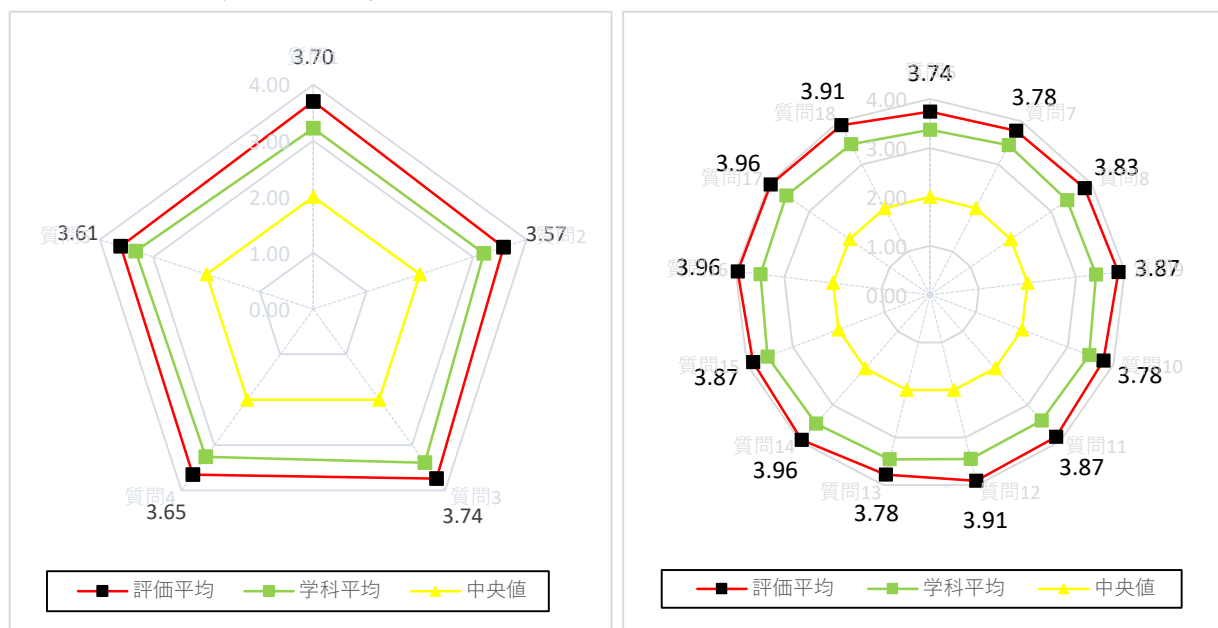
Q1～Q5について：3.67～3.73で推移しており、欠席も少なく、真面目に取り組んだ学生の状況が反映されていると考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

1. 授業評価で高値評価については現状を継続する
2. 講義終了時の質問時間の確保（リフレクションシートで対応はしているが、強化する）
3. 教育内容の精選および資料の構成の工夫
4. 学生主体のワークやPBL方式の検討

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護管理実習	63名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

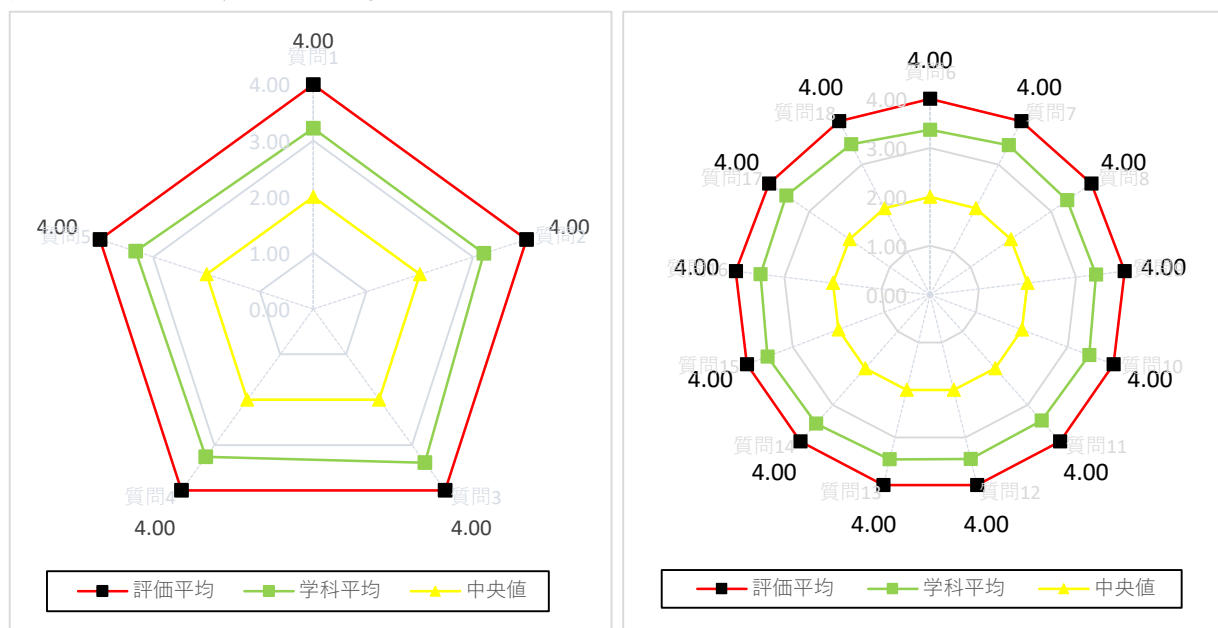
Q6～Q18は3.8～3.9以上あり、概ね良い評価であった。
 Q12～Q18は3.9/4.0と教員に対する評価が特に高かった。実習での学びは学内の講義よりもリアルであり実践を伴うため、考えることによる学びを深めたり、知識と実践の統合も可能にすることができていた。
 Q1～Q5について高値を示したQ1 (3.7)、Q3 (3.74) からわかるように、主体的に、真摯に実習に取り組んでいたと考える。
 この評価に参加した人数が少なくいささか数値に偏りがsる可能性は否めない。

(3) 次年度に向けての取り組み

1. 学生の回答率を向上するための工夫（実習終了直後にタイミングが合えばその場で評価を入力させる）。
2. 入力期間外であれば、あらかじめ入力期間になったら入力を用瀬資することや、入力時期に再度声掛けやメール等で呼びかける。
3. 授業評価で高値項目については現状を継続する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護研究ゼミナール	2名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

【総合評価】

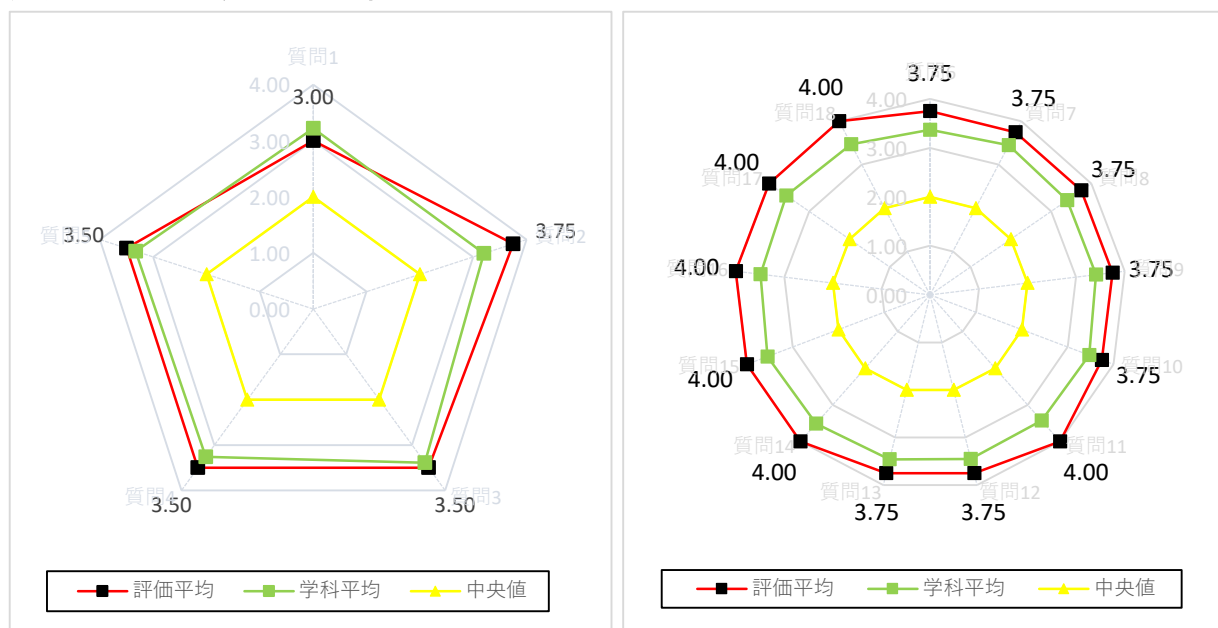
2名ではあるが、いずれも高い評価（満点）であった。
4年次の機がしいスケジュールを配慮した個別の対応、資料の提供もあり、興味のある分野の研究に取り組んだことで、満足感が高かったものとする。

(3) 次年度に向けての取り組み

継続して、4年次のスケジュールに合わせた計画を組み、随時の個別対応、興味のある内容への取り組み支援を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護研究ゼミナール	4名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

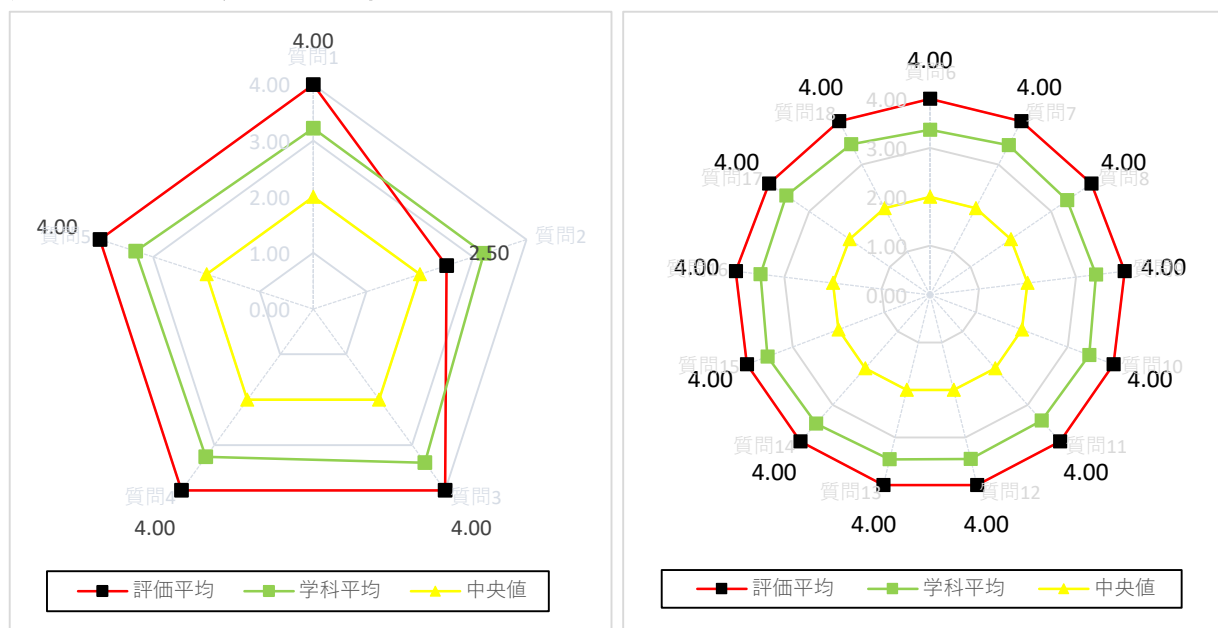
2024年度は、4名の学生の看護研究ゼミを担当した。研究テーマ「遺族へのグリーフケアを行う訪問看護師の抱える課題?」については、単独でケアに当たる訪問看護師の家族への支援の困難や診療報酬などシステム上の課題について明らかにすることができた。「病棟看護師死生観と看取りケア」については、臨床で看取り経験が少ない看護師の経験する不安や困難、死生観がどのように変化していくのかを明らかにした。研究テーマ「若年性認知症者を介護する家族の受容過程について」については、研究がまだあまり進んでいない若年性認知症患者・家族の診断から症状変化の時期にどのような病気体験をするのかを明らかにした。日常生活の困難や工夫など具体的な内容が抽出され、時期ごと項目ごとの看護支援まで考察を深めることができていた。研究テーマ「初産婦と経産婦の産後の母親役割獲得プロセスの違い」では出産経験の有無による母親や家族の状況の違いからどのような支援が求められるかを明らかにすることができていた。個々の学生自身の関心のあるテーマを大切にしながら研究プロセスのサポートを行ったことから、学生も真摯に文献研究に取り組めたと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

実習での経験や目指す看護師像にも関連するため、研究テーマの選定は学生の意見を丁寧に確認しながら行いたい。ゼミ形式の良さ、個別指導の良さを吟味し、研究指導方法を工夫する。また、将来の看護研究活動の基盤となるため、良い経験になるよう支援していきたいと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		教職実践演習（養護教諭）	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

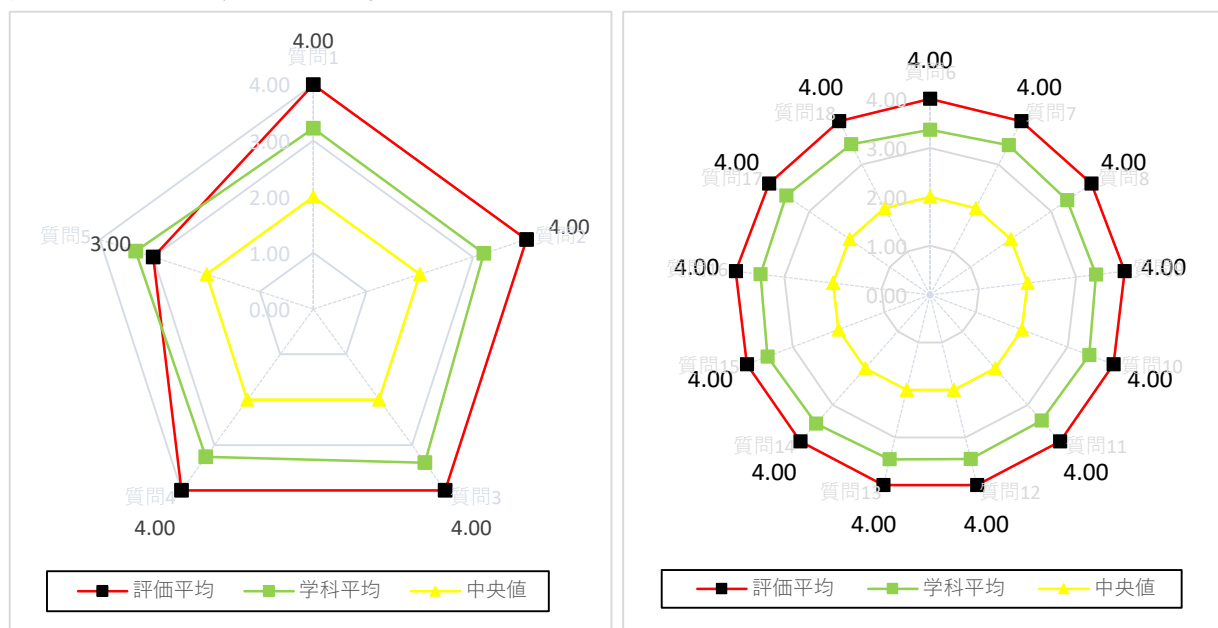
本科目は、教職課程の必修科目であり、養護実習終了後の4年生後期から行われる。目的は教職課程の学びを通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものとされている。しかしながら、講義の時期は養護実習の事後指導、国家試験対策、看護研究が重なり、受講学生は身体的にも精神的にも過密なスケジュールの中で実施しなければならない。可能な限り実習で行った課題を元に展開するように気を付けたが、そのため、一部シラバスと異なった展開となったため学生はシラバスの活用ができなかったと思われる。

（３）次年度に向けての取り組み

まず、今年度はアンケート回答者が少なく、次年度は受講生へ講義時に呼びかけるなど回答率を上げるように呼び掛けていく。開講時期が学生の多忙な時期と重なるため学生のスケジュールも加味しながら講義計画を立てていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		養護実習事前事後指導	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

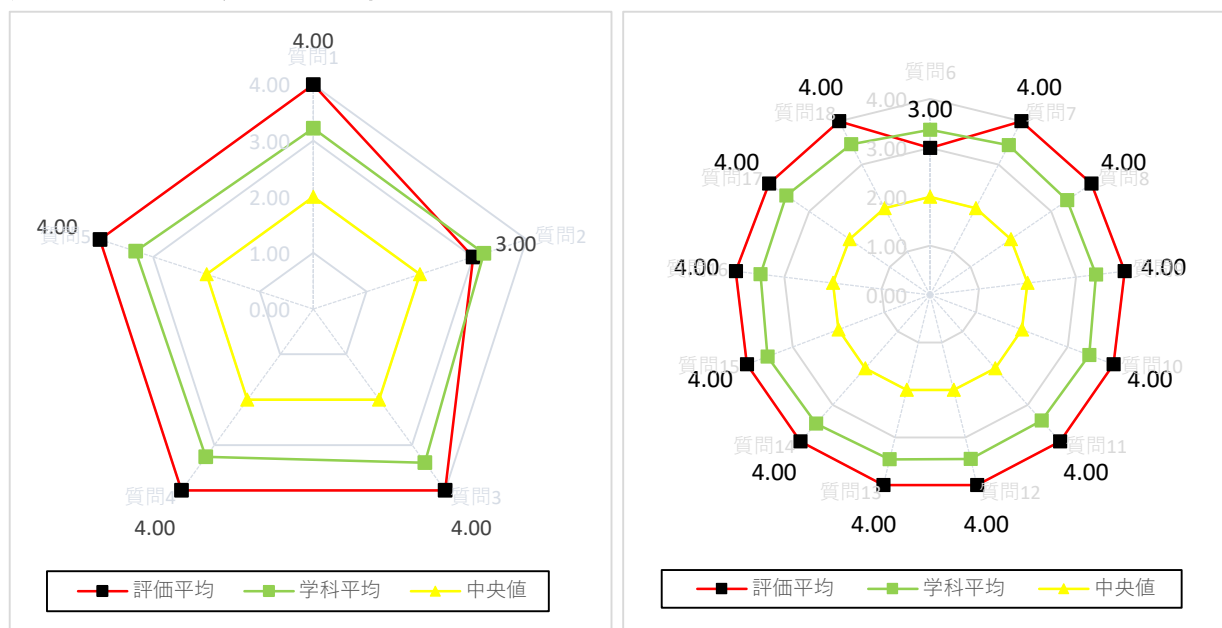
本科目は教職課程の必修科目であり、3週間の養護実習期間の前後に集中講義で行っている。実習校の実習内容に合わせて行うため、講義は学生主体に展開された。今年度は保健科教育と保健指導が中心に行われた。履修学生は指導案の作成から模擬授業の準備、実習校での研究授業の練習を何度も何度も繰り返し、本当によく取り組んだと思う。この成果は実習校での研究授業の成功につながったと思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

まず、今年度はアンケート回答者が少なく、次年度は受講生へ講義時に呼びかけるなど回答率を上げるように呼び掛けていく。実習校と早めに打ち合わせを行い、実習内容の把握と学生が実習前に準備をしておきたい内容を合わせ、学生が不安なく実習に取り組めるようにしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		養護実習	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

養護実習は3週間実習校の保健室に入り、指導養護教諭とone on oneで指導を受ける。そのため実習内容は学生により異なる。この点についてシラバス（授業計画）との差異について説明が不足していた。担当教員は、実習前から実習目的と内容を指導養護教諭と事前に打ち合わせ、実習中は指導養護教諭の指導に合わせた準備ができるように学生を支援した。学生の努力と指導養護教諭の多大なご尽力のお陰にて、満足度が高い実習になったと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

まず、今年度はアンケート回答者が少なく、次年度は受講生へ講義時に呼びかけるなど回答率を上げるように呼び掛けていく。事前に実習内容とシラバス（授業計画）について説明を丁寧に行い、実習校の指導養護教諭と密に連携を取りながら、学生が安心して満足度の高い実習ができるように配慮していきたい。